

土手三番町

岡田美知代子

土手三番町と云へば思出す。御承知の通り日露戦争の砌、私共の先生はさる書肆との關係から、記者として第二軍へ御從軍遊はしたので、其留守中、牛込は若松町と云つた淋しい場末に浦若い女ばかりでは兎角心細く、奥様はお實家方へ、私は其頃通つて居た津田塾も近くなつて、結局便利だと云ふので、土手三番町の御親戚へ預けられる事となりました。

御親戚は淺野と云つて陸軍士官の未亡人——私共の奥様とは實の御姉妹で、お子様は番町學校に通つておいての八重ちゃんお一人、まだ其下が二人ありましたのなれど皆お幼くてお死亡なので、これを力に、恩給の外別に株券で二三千の遺産もありながら、萬事はさく／＼した御氣象の、用も無く唯手を束ねて終日長火鉢の前に座り込んだ處で詮もない、それよりはと、表向き羽織袴一通御仕立物仕候の看板こそ掛けね、以

前から懇しくする先々と特約して、何卒と持つて来れば日限りの急しいのも受合ふと云つた有様。何方かと云へばさく／＼な質で、高貴なかたはともあれ、左様でも無いこちとらの切髪は得て可笑しなものと仰有つて、頭はわざと其儘に、三十六と云ふ年にはふけた、小さな丸鬘にお結びなされる。

家はお壕の土手に添ふた二軒長家、往來に面して舊東湖邸の筋向ひで、素より新しくも無い家の立派とは行かぬが、清潔好きなお奥さんの朝夕のお掃除がとゞいて、格子戸が美しく艶をもちますと、つい近所にお住ひの家主の機嫌も好く、こじんまりとした住居なれど、土手の彼方に中野お茶の水間の電車が出来て以來、甲武線の汽車は主に花崗石を積んだ荷車と變つて、其夥しい地響に建付がゆるぐので、地震嫌ひの奥さんはいつも驚かされて、夜分なら一番にランプを持つて周章で、お立ちなされる笑止さ。壁一重のお隣りは、最初は耶蘇教の傳道師とかで、若夫婦に赤ん坊一人、所謂和氣満々とても云ふのでせう、華やかな笑聲の絶間には讚美歌やら手風琴やら、餘りの騒々しさに私は下調べの書物を閉ぢて、たしなみも無く舌打ちするのでありましたが、今度のは大分異つて弟子と二人許りの表具師さん職人風情には似ぬ至つて物靜かな、一日十五日の外は大抵夜業もするらしい。

横手の露路を隔て、のお向ひは前川さんと云つて、御主人は高師出身とか今は遠く支那の東亞同文書院とやらに教鞭を執られ、二十七八の細君は某學校に勤め乍ら留守を守つて、四十過ぎた出戻りの義姉と、六つ計りの男の子と三人佗しく暮して居られる。淺野の家とは何れも女計りと云ふ處から自

然親しくもなりましたのでせう、此頃では井戸の水が悪いと云つては、飲料だけ水道のを頂きに行くのですが、矢張りお故郷から安原さんと云つて、飯田町の女學校へお通ひのを預つて被居る。

其お隣りには長坂吉郎と表札が出て居て、其前の井戸は一番奥の宮内省へお勤めのヴァイオリニストの高さんと、淺野の家と此三軒で汲む事になつて居るのですが、私が此處へ引移つた四五日前に越しておいでの際、如何云ふ譯か誰もまだ細君の顔を見た者が無い相で、其日々々の用水さへ、毎夜十時を過ぎて世間では最早をろ／＼寝やうと云ふ頃になつて、さも憚つた様に漸く井戸綱をさしらせるのです、て近所では内々、これは屹度引越し嫁だらう等噂して居る者もあつて、主人と云ふのは何處か小學教師か、でなければ美術家位だと、誰も好い加減の想像計りて、ねつから本當の事は知れませんが、朝早く出掛けて何時も歸りは誰彼時の、巾の廣い板の様に薄つべらな風呂敷包みを抱へて、成る程書でも書き相な、年頃二十三四の弱々とした白色の細面の、何處と無くおつとりとした人で、それが惜しい事には跋なのです。

それから淺野の家の丁度ま後ろに當つて、可成り大きな二階家が空いて居まして、家もまだ新しい、市ヶ谷から士官學校の森を望んで、一寸見晴しの好い、間取りの具合等も餘程都合好く出来て、假令小さいにもしろ、二十五圓と云ふ家賃の代りには、物置き迄くつ附いて居るのですけれど、何う云ふものか二階のお座敷ともあるべき八疊にさへ、床の間が一つもありません、その故ですか、随分久しい間貸家札が張ら

れてあり乍ら、中々容易にはがれ相にも見えません。私はい

つても其物置きの處を出入つて、春は摘草、夏ならば團扇片手に涼みがたつて濠から渡つた涼風に袂を拂はせ、秋はまた美しい夕榮の中に、くつきりと浮出た様な富士の高根を遙かに望む可く、其處からそつと巡査の目を盗んで、此土手に登る可からずの禁をも犯すのでした。否、まだそれ計りてはありません、私共は此家の持主の娘と知合ひて、來年とは云へ、最早一月と間も無い其お正月には、大に友達と會して何憚りも無く此空家で夜一夜を歌留多に明さうと約束して、八重ちゃんとも始終其事を云つては楽しみにしたのでありましたが……

あれは確か十二月第二の日曜日と覺えて居ます。日曜と云ふものは兎角何うも氣がゆるんで不可ないものですが、其日も大分寝忘れて、起きて出たのは彼是十時過ぎでもありましたらうか、最早彼方の部屋ではおつちやん——申忘れましたが鶴巻町の材木屋の娘で、其頃奥さんの處へお針の稽古に来て居るのでした——が頻りと羽織の袖口をくけてるんですもの、なんぼ何でも極り悪く長火鉢の傍へ参りますと、何だか露路の方に車輪のさしむ音がして、ガヤ／＼人聲もするんです。

『何てせう』と聞きますと、おつちやんはさも待ち兼ねたと云つた様子に、

『八重ちゃんね酷く怒つて出て行つてよ、だつてもあんなに楽しみにしてたんですもの、無理も無いわ、何だつて又今頃越して來るんでせう、暮じやありませんか、春に成つてゆ

る／＼來りや此方だつて甚麼に都合が好いか、本當に忌々しいつちやありやしない』つて例の非常な早言で、何だか譯の解らない事を夢中に成つて申しますのよ。

『そうじゃ彼の裏の家へ？』私も一寸失望しましたが『だつても仕方が無いわ、ねえおつちやん、素々他人の家なんだもの……』

さう斯うして居るうちに、やがてお晝食に成つて八重ちゃんも歸つて來れば、お話は又引越しの事計り。折柄横手の露路に又一頻り車輪のさしむ音かして、最早大分荷物も運んだらしい。

と勝手元を働いておいでのお奥さんが、そつと入つていらして、

『ねえ可笑しいじゃありませんか、一寸來て覗いて御覽なさい荷物が變ですよ』と仰有るもんですから、私共三人は一度に起つて臺處のお窓から覗きましたが、成程これだけの家へ這入らうと云ふに、露路一ぱいの車の上には、古いの新しいの、大きい小さいの、行李とつづら計りを取り交せて其外長持は勿論、小箆筒一つありません、それで今朝程の一車には夜具一式と何うやら琴箱らしいのを横様に積んで、別に立派なハイカラの子守車が一臺、其中にはまだ新しい行火のやぐらが入れてありましたと、奥さんのお話。

出入る者は皆書生風の、烏打帽に久留米紬の綿入羽織と云つたこしらへ、女と云へば田舎出らしい赤ら顔の、お定り通りよく肥つたお三どんが唯だ一人、書生の合宿かとも考へたが、それでは荷物の具合が變です、下宿かと思へば左様でも

無い様子。

『一鉢甚麼人だらう』

おつちやんも氣になると見えて、其内茶の間の時計が四時を打つても、いつもの様に歸らうとはしないで、尙じつと見入るのでありました。私は夕暮の薄ら寒さに暫く火鉢に温まつて、二度目に例の窓へ顔を出した時には、門前に取散かつた荒縄等も最早ちゃんと奇麗に掃き去られ、寂然として居ましたが、庭を圍んでそう高くも無い黒板塀の上を見越すと、主人でせう、うつむいて顔はよく解らないが、頭を丁寧にかけて髻の立派な、年頃三十左右の男が、椽側一杯取亂した金文字入りの書物の中に埋れて、何か其處いらを片付けにでも掛つて居る様子でしたが、ふと目をあげて私共の姿を見るなり、何とも云へぬ不快な怒つたやうな態度に、ふと起つて内に入り障子を思切つて邪慳に閉めますので。

『餘程變り者だよ』

私は、つとして袖を引きますと、

『聞えなつて好いわ、だつて本當よ』

おつちやんは誠に飾り氣の無い。露骨な質で、私は何時でも何卒此娘の様に自然でありたいと希ふのでありますけれど、場合が場合だけに、此時ばかりは餘りだと思ひました。

其晩です、梅田さんからよろしくつて、擔ぎらしいのが配つて歩いたのを見ると、三番町の柳屋の札で盛が三つ。

翌日學校でお千代さん——家主の娘です——に達ひまして、思ひ掛けずお流れになつた、歌留多會のつまらなさをかこつと、

『堪忍して頂戴、だつて餘り永く明いてたもんで、祖母さんは大悦びなの……それについて可笑しな事を聞く様だけでも、貴嬢の家で引越しの時、随分御覽なすつてたつて本當？』

『何ね、甚麼風な人かと思つて、ほんの暫くよ』

『アラそう、だつてね先方の云ふには貴嬢んここで窓から覗いちや他人の荷物の批評なんかして困るから、如何でも彼の圍ひの上へ、もつと高く板をつぎ足して呉れなくちや不可ないつて、昨夜はね何だか酷い談判なの』

『まあ、それはち氣の毒してね、祖母さん怒つてらしたでせう』

『アラ那麼事決して無くつてよ』

『なら好いけ共……あの一跡其梅田とか云ふのは何する人？』

『何ですか、洋行歸りですつて』

夕暮家へ歸ると、まあ如何でせう、驚ろくぢやありませんか大工が来て居て、本當に新しく板圍ひを造へてるんですもの、餘程嫌だつたのでせう。

尙氣をつけて居ると、引越しの時の書生は皆な手傳ひだつと見えて、其後日曜日一寸々々見掛ける計り、家内は夫婦と當才の赤ん坊一人、妹でせう二十四五の小石川邊りへ通つて居るらしいのと、例のお三を合せて五人の様で、お互に朝夕顔は合せ乍ら近所づから口を利くても無く極り悪く半月計り暮して行く内、私共の先生が目出度く凱旋遊したので、私は又其方へ歸つて八重ちやんの話に聞けば、其後程無く梅田

でも何處へか越して行きした相で、つまりち千代さんの家では圍ひの構ひ損！私に思ひ出す度結句笑ひ度くなりますの。